

ヒューマニズム断片

東京女高師教授

勝部眞長

山中の賊・心中の賊

ユネスコ、すなわち國際聯合教育科學文化機關は、こんどの戦争にこりごりして永遠の平和を衷心から念願する私ども日本人にとつて何よりも深い關心の的となる國際的な組織です。ユネスコができて世界平和の促進に世界中の心ある人々が力を合せようとしているならば、私どもも占領下の敗戦國民ではありますが、許される範圍で遙かに聲援を惜しまず協力することを表したいものです。第一に私どもにとつて心すべきことは、いかなる意味においてもはや戦争を豫期してはならないという事ではないでしょうか。たとえ近頃人はよく「第三次大戦があるのではないか？」とか「米ソ戦は起ると思いませんか？」などと將來のことを憶測したり心配したりしますが、しかし私ども憲法で戦争権を放棄した人間にとつて戦争はもはや何の關心もない、第一戦争はもう二度と起らない、否起るべきでない、と固く信じて疑わず、そんなことよ

りもひたすら平和の維持のために積極的な協力をつとむべきであると思えます。いやしくもインテリをもつて任じ、教育や科學や文化にたずさわる者にあつては、戦争などという文字は、桑原々々、金輪際口にせぬこととし、不能の文字はナポレオンの辭書にはなかつたと申しますが、私どもの辭書には「戦争」という文字は一切抹殺したいものです。労働問題がやかましい此頃は、勞資の對立から、ストライキの掛け聲いさましく、組合運動の宣傳ビラにも、「斷乎闘争」とか「飽くまで戦う」とか「長期抗戦」とかまるで戦争気分が脱けずに愈々國內の人間同志で内亂でも起しているみたいな有様、「戦争」とか「闘争」は人間の本性に深く根ざしたものなので、もありましようか。

ユネスコの規約の前文にある有名な文句、「戦争が人々の心の中からはじまる以上、平和の防備が築かれるのも人々の心の中においてでなければならぬ」というのはアトリー氏の言葉から引いたのださうであります。私はこの文句を讀んで、私ども東洋の人間が昔から口にしたありふれた文句を連

想いたします。すなわち、

「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。」

人間の心の中にブスブスくすぶつてゐる戦争意識・闘争意識がすなわち「心中の賊」とよばれるものでありましよう。

この心中の賊を破らずしては、外形的な戦争「山中の賊」は第一次のあとに第二次、第二次のあとに第三次、と何度でも蒸し返す怖れがあるのでしよう。

しかし私も日本人にはこの山中の賊を破る資格もなければ手段もはやありません。なぜなら戦争権を放棄し武器は一切所有せぬからです。私どもの爲すべきことは唯一つ、心中の賊を破ることだけです。平和の防備を心の中に築くことです。こゝにヒューマニズムと云ふことの本質的なものがあると思ひます。

由らしむべし、知らしむべし

論語の泰伯篇にある孔子の言葉、「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず。」は傳統的な東洋の智慧として、東洋の政治家の金科玉條の如くに考えられてきました。けれどもデモクラシーの叫ばれる今日は、もうこんな言葉を引用する政治家はいなくなつた事でしよう。たしかに孔夫子の最深の智慧をもつてしても、ヒューマニズムと云ふ見地からすれば右の言葉には民衆に對する一種の諦めが感じられて孔子の

「仁」(東洋的ヒューマニズム)の限界リミットにつき當つたように思われ淋しい氣持になります。政治家の心得として孔子の説く所は、「民衆をして政府のなす所に信頼せしめよ、之に一々わからせようとしてもそれは出来ない事だ、政策の一々について民衆の理解や容認を得られるものではない。それよりあの人とする事だから任せておこうではないか」といふ信頼感を平生から博しておく事だ。」と、こゝういふ意味でありましよう。

たしかに私も八千萬の國民の一人のこらすが、新憲法の條文を悉く理解し、政府發表の經濟白書をたんねんに讀んで之を理解するといふ事は一寸困難なことです。「知らしむべからず」知らせることができないと云う嘆きは尤もです。この點はおそらく、デモクラシーの本場本元のアメリカといへども、國民の中に一人の文盲もなく、合衆國の政府の發表する法令や大統領の敎書を一人も洩れなく讀むことが出来る、理解できると云う状態にまでは未だ到つていないだらうと思はれます。(或はもう到つてゐるのかも知れませんが。)けれども、とにかくデモクラシーの政治形態がヒューマニズムによつて裏打ちせられてゐると云えるとするれば、民衆の一人一人の人格の自由と平等とを重んじ、すべての人間に自覺を期待するといふ建て前からしても、「知らしめることができない」として嘆いて諦めてしまわずに、「知らしむべし」(知らせることができる、すべきだ)として民衆のすべてに全幅の期待と信頼とをかけるものでなくてはならないでしよう。東洋人

のもつ諦観や消極性をます政治面において脱皮しなくてはならないではありませんまいか。

女子と小人

「女子と小人は養いがたし。」という孔子の言葉もまた御婦人にとつて實に失禮千萬な、頑冥な思想を表わす以外の何者でもないような言葉であります。今日は男女同權の世の中であり、萬人平等の、従つて君子も小人も本來無差別なのであり、第一自己を君子（人格者）として優越的に小人（平凡人）と區別して己を持するなどという事が滑稽に感じられる。

民衆の天下の時代であります。徳、才に勝れるを君子といひ、才、徳に勝れたるを小人という、などと君子小人論の喧しかつたのは昔のこと、今日は才徳ともに民衆の能力に無限の期待をかけて疑わない世紀であります。婦人の能力についても同様。それを、養いがたしとして、たゞ咏嘆して諦めてしまふのは早計にすぎる。御婦人に云わすれば、「男子こそ養いがたし」とくるかも知れない。何にせよ、咏嘆し、諦めてしまふ所に、ヒューマニズムは成立しないと申さねばなりません。時として、たとえば小さい子供など頑是ないものは、いくら話してきかせても、なだめすかしても、聞き分けがなく、全く手がつけられないような場合、養いがたしの歎きが洩れてくる事もありがちですが、しかし私どもの根本の態度においてあきらめということは賞めたことではなく、どこま

でも幼児に對する期待と信頼とを捨てずに、眞剣に之を一人格として正面から對持し、本氣で怒り、本氣で話し合うのがヒューマニズムというものであらうと私は考えます。

謂はゞヒューマニズムは人類性として、世界人類の立場にまで押し廣げて人間を考えてゆく事だと思ひます。世界的視野においてどの個人をも考えてみる事だと思ひます。狭く限局された狹隘な人間觀からは、あきらめが先に立ち、咏嘆と消極と無爲しか出て來ず、希望と信頼と愛情とは湧き出でこないではないでしょうか。

○大會記録

全國幼稚園名及保育一覽表便覽添付

頒布價格 二〇〇圓程度

發行情日 十一月上旬

申込所 大阪市南區内安堂寺町二ノ一六

昭利出版株式會社